

特集

——シンポジウム「19世紀出版文化とユニテリアン・ネットワーク——Harriet Martineauを中心として」

Harriet Martineau と *The Westminster Review*

——奴隷制廃止論のためのプラットフォームの選択と基準——

松本 三枝子 (愛知県立大学)

序

男女の教育の機会や、就業の機会が均等ではなかった19世紀イギリスにおいて、なぜHarriet Martineauは、政治・経済分野を専門とするジャーナリストとして、生涯にわたり活躍することができたのであろうか。様々な要因が考えられるが、その中で特に重要な要因のひとつは、彼女がユニテリアンの家庭に育ったことであろう。Norwichの工場経営者の娘に生まれ、兄弟は高等教育を受け、長兄のThomasはノリッジの開業医となり、弟のJamesはユニテリアン派の著名な聖職者となっている。ユニテリアンは、信仰の自由を尊重し、宗教における理性の活用を容認している。そのために教育を重視しており、女性や労働者の教育に対しても、国教会派の人々よりも熱心であった。工場経営者の娘であったハリエットは高等教育を受けていないものの、同時代の女性に比較すれば、教育を重視するユニテリアン派の家庭という恵まれた環境にあった。彼女は幼年時代から難聴と虚弱体質のために、家庭で兄や姉から、読み書き算数に加えて、フランス語やラテン語文法まで習っている。その後、ユニテリアン派の聖職者から、ラテン語、フランス語、算数、地理学などを2年間にわたり姉と共に学んでいる。さらに、叔母の開校したブリストルの学校で14か月学んでいる。冬には炉辺でシェイクスピアをひとりで読んでおり、食堂では新聞を隅々まで読んでいる。彼女の*Autobiography*によれば、これらの経験は、彼女の政治・経済への興味を喚起し、後の政治経済学への関心を持つことになったとしている(1:70)。少なくともユニテリアン派のマーティノー家では、娘が知的な活動をすることを促すことはあっても、妨げることはしていな

い。その結果、ハリエットは、14歳の時には、匿名でユニテリアン派の宗教誌である *The Monthly Repository* に “On the System of Malthus” を投稿するまでになっている。

要因の二つ目は、功利主義との出会いである。この思想の原則は、Jeremy Bentham により提唱された「最大多数の最大幸福」であり、18世紀末以来、J. S. Mill などにより広く普及し、19世紀イギリスの政治・経済・社会の改革に対して大きな影響を与えた思想である。ユニテリアンは、非国教会派として、宗教的にはもちろんであるが、政治的にも社会的にも様々な差別を受けてきたために、改革意識が極めて高い宗派であった。マーティノーが、作家として、またジャーナリストとしての修業と研鑽を積んだ、*The Monthly Repository* の編集者であった William Johnson Fox の助言や指導の下に、彼女は同時代の政治・社会を改革するために、有益な思想である功利主義や政治経済学などへの知見を深めていった。フォックスによる薫陶はユニテリアンのマーティノーが求める社会改革の方向性と一致し、理論的にも支援するものでもあった。ユニテリアン主義と功利主義は、ハリエット・マーティノーにおいては、緊密に結びついたものであり、彼女の社会改革意識を根底から支えるものであった。

本論では、そのようなマーティノーと、功利主義をはじめとする改革思想を広く普及するために創刊された *The Westminster Review* との関係の詳細に分析することにより、性別役割分担や、性差別が歴然としてあった19世紀のイギリス社会において、どのようにマーティノーが政治・経済を専門とするジャーナリストとして、生涯にわたり活躍することができたのかを考察したい。

1. ユニテリアンと功利主義

ユニテリアン派の宗教誌であった *The Monthly Repository* (以下MRと略記) の編集者であったフォックスはベンタムの葬儀において説教を行っており、この宗教誌の巻頭言には、ベンタムからの引用が記されていた (Mineka 146; Gleadle 14)。つまり、マーティノーが作家としての修業時代を過ごしたこの宗教誌は、功利主義思想と極めて深い関係にあったことが分かる。特にその編集者であったフォックスは個人的にもベンタムを尊敬しており、

思想的にも傾倒していた。まさにそのフォックスから、マーティノーは、当時のドイツ文学や高等批評の重要性などを学んでいた。つまり、フォックスとマーティノーは師弟関係にあったといえるのである。そのため、マーティノーは、*MR* やフォックスを通して、功利主義思想を理解し、社会改革意識を高めていったといえるだろう。その結実が、政治経済学の普及により、同時代の政治・経済・社会改革を行うためのシリーズである *Illustrations of Political Economy* (『経済学例解』1832-34) であった。さらに、彼女がこのシリーズを出版し、作家としての名声を確立した後は、ペンタムが急進主義思想を普及するために創刊し、James Mill や J. S. Mill などが支援し出版した *The Westminster Review* (以下 *WR* と略記) の影響が大きくなり、マーティノーと *WR* との関係は極めて緊密なものとなった。

しかしながら、ユニテリアン主義と功利主義との親和性は、マーティノーにおいてのみ生じていたのではなく、この二者の根源的な親和性によるものであったことを、Kathryn Gleadle が、次のように的確に指摘している。

As Margaret Parnaby explains, ‘By the 1820s leading metropolitan Unitarians were becoming the natural companions of *utilitarians*. What drew them together was the vision of a sober, serious-minded and self-improving society.’ The relationship between these two movements was typified by such projects as the establishment of the *Westminster Review* and the foundation of London University. Both of these ventures were born from the marriage of Unitarian and utilitarian personnel and ideas. (Gleadle 14-15; emphasis added)

つまり、フォックスなどの冷静で、真面目に考え、自己改善する社会を実現しようとするユニテリアンの人々と、急進主義的な改革思想であった功利主義とは本来的に親和性が高かった。このような二者の融合から誕生したのが *WR* であり、ロンドン大学であった。『経済学例解』のシリーズを出版後に休暇を兼ねて旅行したアメリカからの帰国後に、旅行記である *Society in America* (1837) を出版し、作家として順調な歩みを進めていたマーティノーに、*WR* から執筆依頼が入った。『自伝』によれば、成功した彼女

の元には、様々な出版社からの依頼があったが、彼女が選択したのが *WR* であった。『自伝』には次のような経緯が示されている。

It was in August of that year that the Editor of the *Westminster Review* (then the property of Mr. J. S. Mill) called on me, and asked me to write as a review of Miss Sedgwick's works. I did so for the October number, and I believe I supplied about half-a-dozen articles in the course of the next two years,—the best known of which is ‘The Martyr Age of the United States,’—a sketch of the history of Abolitionism in the United States, up to that time. (2:107)

ここで言及されているセジウィック嬢 (Catharine Maria Sedgwick) とは、カルヴィン主義からユニテリアンに改宗したアメリカの女性作家で、“Republican motherhood” (「共和国の母親」) を体現する女性登場人物を小説の中で描いた、当時もっとも成功した女性作家のひとりであった。この書評を契機に、さらに2年間 *WR* との良好な関係は継続している。「合衆国の殉教者時代」は、反奴隷制を新聞で論じる権利を主張して亡くなった Elijah P. Lovejoy を論じた記事である。前者は、政治・社会に貢献する新しい母親像を小説に登場させた女性作家であり、後者は、反奴隷制のために殉教したジャーナリストである。いずれも、マーティノーが関心を持っていたテーマを、*WR* は依頼したことが分かる。また、R. K. Webb が指摘しているように、元来彼女はこの季刊誌を高く評価していたために執筆は念願であったのだ (Webb 176)。当然のことながら、マーティノーとこの季刊誌とは良好な関係を継続していくことになる。

ユニテリアンのマーティノーは、14歳でマルサスを論じた時から、ある意味で、明確な自己主張があった。『経済学例解』は、物語により分かり易く政治経済学を解説したシリーズであったが、マルサスの人口論を扱った物語は賛否両論があった。当然のことながら保守派の評論誌などは酷評した一方で、急進的な *WR* は、マーティノーにとり、持論を展開できる場を提供したのである。Linda Peterson がこの時代の『経済学例解』を取り巻く雑誌間の論争を次のように論じている。

Martineau's *Illustrations of Political Economy* series would have aroused *Fraser's* ire whether its author had been male or female. As Miriam Thrall documents in her study of the magazine, *Fraser's* included 'numerous articles and burlesques voicing its protest against the materialism of the political economists'. This protest occupies the longest paragraph of Maginn's verbal sketch, with its attack on Martineau as the 'idol of the *Westminster Review*' (the periodical of the Utilitarians) and its expression of disgust that Malthusian doctrines should be disseminated into all hands, to lie on the breakfast tables of the young and the fair, and to afford them matter of meditation. (21-24)

保守派の評論誌である *The Fraser's Magazine* と、改革思想、特に政治経済学を積極的に支持する *WR* との対立が、厳しいものであったのは当然である。とりわけ、結婚前の若い娘であったマーティノーが、マルサスの人口論を論じたこと、人口の増加は食糧の増産を上回るの、人口抑制が必要になると論じたことを厳しく批判していた。加えて、そのような理論を物語にして、女性や若者たちへ普及しようとしたことにも強い嫌悪を感じている。このような状況の中で、マーティノーにとり、前述したような *WR* からの執筆依頼は、彼女の関心がある女性論や奴隷制廃止について正に論述できる場所を提供していたことが分かる。

このようなマーティノーと *WR* との関係は、1850年代になり一層緊密なものとなっていく。鍵を握るのは、この時代の同誌の編集者であった John Chapman であった。

1850年代、イギリスの進歩派知識人の多くが関心を持った業績が、Auguste Comte の実証主義哲学であった。特に、*WR* の関係者たちは実証主義への関心が高かった (Webb 314)。その中で、マーティノーは、コントの翻訳を計画した。

Against such a background of positive if non-theological faith must be seen her enthusiasm for Comte's *Positive Philosophy*. Neither she nor Atkinson knew Comte's work directly at the time of their book, and

they came to what knowledge they had through the chapter on him in Lewes's *Biographical History of Philosophy* and the epitome by Comte's disciple Littré. She had no sooner begun to read the work itself in the spring of 1851 than she hit upon the idea of translating it, a scheme which after some consultations became a plan for a free translation and condensation, reducing the six volumes of the original to two, to be published by John Chapman. (Webb 303)

ここで、マーティノーが実証主義哲学の翻訳に取り組んでいく経緯がよく分かるのだが明らかなのは、WRの執筆者のひとりであったG. H. Lewesの方が先に関心を示しており、それがマーティノーの翻訳への関心を促進する結果となったことである。このほかにも、彼女よりも先に、コントの翻訳に取り組んでいた人物はいるのだが、交渉の末に、マーティノーの翻訳がチャップマンにより出版されることになった。チャップマンは、進歩派企業家のEdward Lombeに彼女を紹介し、£500の資金が彼女に提供されている。ルイスも同様の翻訳書を出版したのだが、T. H. Huxleyはマーティノーの翻訳を高く評価した書評をWRに掲載している(61:254-57, 1854)。WRの副編集者であったGeorge Eliotは、ルイスのパートナーであり、ハクスリーの書評の掲載に反対したが、マーティノーの翻訳への高い評価は変わらなかった。当時のWRは、発行部数3,000の進歩派の季刊誌であり、その編集者であったチャップマンの周囲には進歩派の知識人が集まっていた。チャップマン・サークルと称された人々の中には、支援者であるJohn Stuart Mill、William Benjamin Carpenter、Robert Chambers、George Holyoakeなど、その執筆者には、George Eliot、T.H. Huxley、Frances Newman、W.R. Greg、Herbert Spencer、G.H. Lewes、Harriet Martineauなどがいた(Gleadle 41)。

チャップマンは人物としては魅力的で、彼の周囲には多くの人々が集まったが、経営の才覚はなかった。開業医としてのクリニックの経営でも行き詰まっていた。改革派の雑誌としてWRを高く評価しており、自らの意見表明の場としても必要としていたマーティノーは、彼のために資金援助までしている。

My Good friend and publisher, Mr. Chapman, had just failed, —in consequence of misfortunes which came thick upon him, from time of Mr. Lombe’s death, which was a serious blow to the ‘Westminster Review.’ Mr. Chapman, never in all our intercourse, asked me to lend him money; yet the ‘Westminster Review’ was by this time mortgaged to me. . . . The truth of the case that I had long felt, as many others had professed to do, that the cause of free-thought and free-speech was under great obligations to Mr. Chapman. . . . (*Autobiography* 2:425; emphasis added)

『経済学例解』のシリーズを出版する前の20歳代には、年収は£50に過ぎなかったが、40歳代に入り作家として成功した彼女は、自由な思想と言論の自由を守るためのプラットフォームとしてWRに資金援助し、その抵当権を£500で入手している (*Letters to Fanny Wedgwood* 129)。ここで強調したいのは、言論の自由や思想の自由を守るための守護神として、チャップマンを高く評価していることである。そのために、依頼されたわけではないが、資金提供したと、わざわざマーティノーは、『自伝』でも言及しているのだ。

マーティノーにとり、WRは、若い時代には憧れの雑誌でもあったわけで、そこからの執筆依頼に充実感を感じてさえいる。それが数十年後には、その雑誌の経営危機を救済するまでになっている。MRにマルサス論を匿名で掲載した10代から、着実に作家として、ジャーナリストとしての地位を確立していったことがよく分かるのが、このWRへの資金援助である。しかしこのマーティノーとWRとの蜜月時代はやがて終焉を迎えることになる。次節では、この雑誌とマーティノーの関係の変化について論述したい。

2. ライフワークとしての奴隷制廃止論

ジャーナリストとして、マーティノーの生涯にわたるテーマとして挙げられるのは、奴隷制廃止論であるのは間違いない。それは、彼女がジャンルを超えて、奴隷制廃止について書いていることから分かる。例えば、

『経済学例解』のシリーズのひとつに、*Demerara* (1832)と題された植民地における奴隷制について論じた物語がある。イギリスで、政治経済学を学んで植民地のデメララに帰国した若者が、父親の農園を立て直していく物語である。この物語では、奴隷制は、経済的非効率という観点から批判されている。

アメリカ旅行後に出版した *Society in America* (1837) は、アメリカ社会論としても定評がある紀行文であるが、マーティノーは、奴隷制廃止論者として受け入れられ、南部の旅行では生命の危険を警告されたと記している。アメリカにおける奴隷制の実態を詳細に観察し、奴隷制廃止論者たちとの交流により多くを学んでいる。この旅行中に培った奴隷制廃止論者たちとの紐帯が、帰国後の彼女の奴隷制廃止論を展開するための情報源となっていく。

次に重要な作品は、ヒストリカル・ロマンスの *The Hour and the Man* (1841) である。これは、ハイチの黒人奴隷から指導者となりハイチの独立のために、ナポレオンと闘い、命を落とした Toussaint L'Ouverture を主人公にしている。このように、マーティノーは奴隷制廃止について、ジャンルを横断して書き、論じていることが分かる。そのため、奴隷制廃止は、女子教育論などと同様に、彼女にとりライフワークと位置付けられる重要な論題である。それゆえに、この奴隷制廃止論をめぐるマーティノーとチャップマンの対立は、決定的なものとならざるを得なかったのである。

それは、1857年に *WR* に掲載されたマーティノーの時事評論、“‘Manifest Destiny’ of the America Union”が契機となっている。それは次の4冊の書籍を書評する形式で書かれている。William Chambers 著 *American Slavery and Colour* (1857)、Fred Law Olmsted 著 *A Journey in the Seaboard Slave States; with Remarks on their Economy* (1856)、同じく *A Journey through Texas; or, a Saddle-trip on the South-western Frontier: with a Statistical Appendix* (1857)、Harriet Martineau 著 *A History of the American Compromises*. Reprinted, with additions, from *The Daily News* (1856)、自著を含む上記の書籍は、同時代のアメリカの奴隷制、あるいは奴隷州について論じている。彼女の論旨は明快で、1850年代のアメリカは第2の革命が切迫している状況にあると分析し、そこに至るこれまでの経緯と原因を次のように考察している。

Our readers are by this time making comparisons, no doubt, between the incidents and feelings belonging to the first American revolution and those which have for some time past, and with perpetually increasing force and clearness, indicated a second. We believe we have the means of showing that a second great revolution is not only approaching, but actually far advanced, and that some of the wisest and best of American citizens have so far profited by the lessons of their fathers as to be fully aware of their real position, though a vast majority still insist, as the new President did in his inauguration address, that “all is calm” because his party has carried the election. (*WR* 68:140)

その論調はかなり過激で、“revolution”、“revolutionary”などの表現が多用され、刺激的ある意味では挑発的な論調で、危機感を次のように伝えている。

For thirty-seven years the great constitutional question has come up again on all marked occasions, and under many phases, till the present year, when all the conditions of revolution are fulfilled, and there appears to be no escape from the alternative of an overthrow of the original constitution of the Republic, or its preservation by means of a separation of the States. (*WR* 68:149)

アメリカの独立に続く第2の革命が逼迫している状況では、共和国憲法を放棄するのか、合衆国を奴隷州と自由州に分離することでそれを維持するのか、選択が求められるとしている。この論旨は、書評の対象でもある自著の *A History of the American Compromises* と同じものであり、一貫している。

ここで記事のタイトルにある“Manifest Destiny”について言及しておきたい。これは「明白な天命」とも訳されるが、*Democratic Review* で John O’ Sullivan が 1845 年に用いたとされる領土拡張論である。アメリカの西漸運動、テキサスの併合などを弁明したスローガンであるが、問題となるのは、

領土拡張した後に、そこが、奴隷州となるか自由州となるかである。書評のタイトルからも、マーティノーが批判しているのが、アメリカ政治そのものであることが分かる。マーティノーの批判は、アメリカ政治における奴隷制の位置付けと考えられる。それは、自著のタイトル『妥協のアメリカ史』が明らかにしているように、妥協の歴史とみなしている。つまり、北部が連邦の解体を恐れるあまり、南部に対する妥協を重ねた結果が、回避できないまでに逼迫した南北の対立に直面する結果になっているとの、現状分析がなされている。マーティノーの議論をしばらく追跡することで、彼女の批判を明らかにしたい。

政治的妥協の始まりは、1820年の“Missouri Compromise”であった。西部への領土拡大は、獲得された領土が奴隷制を廃止するか否かが深刻な政治問題となった。ミズーリ州を奴隷州とするが、メイン州は自由州とし、ミズーリの南部境界より北の領地では奴隷制は禁止される。議会での南北のバランスを考慮したこのような協定を、妥協案として、彼女は厳しく批判している(68:148,150)。マーティノーの立場とは異なり、当時のアメリカの政治家にとっては、奴隷解放よりも、連邦の維持が重要課題であった(アール 62; 布留川 207)。「ミズーリ妥協」を提案する Henry Clay のような政治家に対して、奴隷制を廃止するよりも、その議論を回避することで容認する結果になっていると、マーティノーは批判している。

彼女が北部の譲歩により生じた最悪の結果とみなしていたのが、“Dred Scot Case” (1857) であった。この判決は、アフリカ人の子孫はアメリカ市民にはなれず、議会は奴隷制を禁じる権限がないとしたアメリカ最高裁判所の判決である。南部を支持する判事たちを中心とした判決であるが、当然実効力があるもので、国内で論争になった。マーティノーはこれを解説しながら、彼女の立場では当然であるが厳しく批判している(WR 68:166-67)。

このマーティノーの時事評論を分析して明白になることのひとつが、奴隷制廃止を最優先課題とする彼女の立場である。次節ではそのような彼女の奴隷制廃止論とアメリカ政治に対する批判について詳しく論じたい。

3. *The Westminster Review* との決別

自由を主張した黒人奴隷に対する最高裁の「ドレッド・スコット判決」は、時代に逆行するものであり、南部に対して譲歩を続けてきた北部の政治的な妥協の結果であると、マーティノーは厳しく批判している。その論調は北部州の現状分析により強化されている。例えば、マサチューセッツ州が、有色人種が海外渡航を希望した場合には、パスポートを発行すると言及したうえで、さらに次のように、連邦解体の方向を目指していると報じている。

Again, Massachusetts was, we believe, the first State which organized Disunion Associations,—societies formed to spread such information, and afford such centres of opinion and action as would prepare and bring about a dissolution of the Union; and the recent action of the Supreme Court has remarkably increased the number of these societies in the North. (*WR* 68:163-64)

つまり、最高裁による「ドレッド・スコット判決」以後に、北部の自由州では、連邦解体の傾向が顕著になったことを論述している。これらの動向を踏まえた上での、アメリカにおける南北を分離する提案がマーティノーからなされるわけであるが、チャップマンには、「アメリカの明白な天命」で展開されるこの結論は受け入れがたかった。

マーティノーからチャップマンに宛てた次の書簡が二人の関係の変化を露呈している。

No “sheets” [“‘Manifest Destiny’ of the American Union”] have arrived. As soon as they come, I will see what I can do, without delay. Your view is to me another melancholy proof of the real effect of W. Chambers’s procedure. I have no hope of enabling you to see how the case really stands in the course of a letter; & I see that your feelings will not allow you to say anything about W. C. other than praise: but I will just try to indicate the true aspect of the matter. (*Collected Letters* 4:33)

この書簡は極めて長いものであるが、ここで明らかになるのは次の二点であろう。第一に、チャップマンが、マーティノーの時事評論である“‘Manifest Destiny’ of the American Union”に批判的であること。第二に、チャップマンは称賛しているが、W. Chambersの旅行記よりも、マーティノー自身の評論の方が、奴隷制の実態を伝えていることである。彼女がチェンバーズの旅行記の欠点として挙げているのは、彼が奴隷制廃止のためにこれまで闘ってきた奴隷制廃止論者たちの歴史と役目について看過していることである(WR 68:141)。つまり、チェンバーズの旅行記では、アメリカの栄光や繁栄が極めて楽観的に論述されているが、その深層には、緊迫したアメリカの現実があり、奴隷制に関する長年わたる南北対立が無視されているというのが、マーティノーの見立てである。

チャンバーズには厳しい批判を繰り広げているマーティノーであるが、Fred. Law Olmstedの二冊の旅行記については、信頼して詳細に言及している。例えばオルムステッドが、テキサスへのドイツ人やドイツ系白人が移住する実態を指摘して、彼らが自ら労働し、それにより資本を獲得しているために、奴隷所有者と対立する関係にあることを論じている。それに関して、マーティノーは、次のように評価している。

The reader of Mr. Olmsted's charming narrative of his experience among the German settlers, will need no arguments to convince him that any conflict between free and slave labour on that fair field must issue in the defeat of the latter. . . . Here, then, is a fourth element of Southern population, small at present, but steadily increasing, and admirably placed for driving back slavery from the south-western frontier. (WR 68:145)

ここで、南部人口の構成集団である第4集団とは、ドイツ人やドイツ系移民のことを意味している。第1は200万人の富裕な白人資産家層、つまり奴隷所有者であり、第2は彼らが所有する400万人の奴隷、第3は600万人の労働意欲がない貧困白人層である。自らの労働により、資本を獲得していくドイツ人やドイツ系移民は少数派であるが、労働を軽視する白人

資本家層や、労働を嫌悪する白人貧困層と対立関係にある。そして、マーティノーはこれらの自ら労働し資本を獲得していく人々が着実に増加して、やがて奴隷制を南部から排除していくことになるとしている。この考え方に通底しているのは、功利主義思想とユニテリアン主義の親和性について前述した“the vision of a sober, serious-minded and self-improving society”（冷静で、真面目に考え、自己改善する社会という展望）を支持するマーティノーの価値観がある。それは改革を支持する功利主義思想に裏打ちされたユニテリアンのマーティノーの変わらぬ信念である。

さらに、現在の南北の危機的対立を生じさせた契機となる法律である1850年法に次のように言及している。

It is not possible for us to give a continuous narrative of the events, the successive steps, by which the results of the Acts of 1850 have deepened into the present revolutionary crisis. We have exhibited one instance of the working of the laws which repealed the Missouri Compromise; repealed it, not for the sake of restoring the old faith in the powers of Congress, and the old restrictions on slavery, but in order to subject the whole Union to the control of the Southern section, and to throw down the remaining barriers by which free labour was protected. (*WR* 68:153)

「ミズーリ妥協」を破棄する1850年法は、南北の対立を回避しようと譲歩した結果、奴隷制を維持することになった。そして、1857年の「ドレッド・スコット判決」に至り、奴隷はアメリカ市民にはなれず、主人の所有物同様にどこにでも連れていけるとするこの判決により、アメリカ全体が奴隷州になり下がったとしている。当時のアメリカ北部の状況からすれば、この判決は時代遅れなもののみならず、アメリカが独立により獲得した自由を放棄するものであり、むしろ旧世代の運命のもとに隷属するものとなったことは明らかだとしている (*WR* 68:156)。しかしながら、問題なのは、そのような北部が南部に対して、連邦の維持を求めるあまりに、譲歩を続けている現状である。北部はなすべきことが多いとマーティノーは続けている。

. . . the North has much to do to give the world assurance that the impending revolution will be worthy of a comparison with the former. The Free States must now either yield or resist. It will not suffice for the Supreme Court to rescind its judgment, while its present constitution is such, that a repetition of outrage may happen any day. An attack has been made on the sovereignty of the States which must be decisively and finally repelled, or, on the other hand, submitted to: and either alternative is revolution. (WR 68:168)

北部は、現在の革命的な危機状況が、アメリカ独立革命に匹敵するものであることを世界に確信させるためにやるべきことが多いとしている。自由州は、最高裁判決を無効にするだけでなく、合衆国の主権に対する攻撃に対して撃退するのか、従属するのか選択せねばならず、いずれにしても革命は不可避である。このようなマーティノーのアメリカの現状分析からすれば、チェンバーズの旅行記が語るアメリカの繁栄や栄光は、あまりに楽観的なものとして退けられることになる。

前述したマーティノーからチャップマンに宛てた書簡は、それゆえに、チェンバーズの旅行記に対する彼女の批判のみならず、それを評価するチャップマンへの異議や不満を露呈したものとなっている。さらに、原稿料の支払いが滞りがちなチャップマンに対して、彼女は躊躇なく、上記の手紙の約1か月後に、WRとの関係を見直すことを望む書簡を彼に送っている。

One additional ground for desiring it [transferring the mortgage] is that such an arrangement as now exists may be very embarrassing to yourself, if, as some people have an impression, your views shd tend more & more away from free thought, & in the direction of orthodoxy, — religious & other. It is altogether as the organ of free-thought that I have done what I could in support of the Westminster, & I shd be heartily sorry to have either to hamper your mental processes, or to find myself connected with an organ of opinions wh [ich] are essentially different

from my own. (*Collected Letters* 4:40)

マーティノーは、思想の自由から距離を置き、宗教的あるいはその他の領域で正統性へと向かっている *WR* を、本来の姿ではないとして批判している。1838年に、彼女の書いた“The Martyr Age of the United States”を掲載した思想の自由と言論の自由を守る *WR* の姿勢から、大きく変貌し、保守化したことを明晰に批判し、抵当権の引き上げを提案している。この間にも、アメリカにおける奴隷制については次々と問題が生じており、アメリカ政治は緊迫した状況となっている。マーティノーは、チャップマンの *WR* を見限り、約1年後の1858年6月26日に、それまでは文学重視のために“the grandmotherly magazine”と揶揄していた *The Edinburgh Review* (以後 *ER* と表記) の編集者である Henry Reeve に宛てた書簡を書いている。

I have spoken out about Liberia in the *Westminster Review*; (a year ago:) but since that, I have got hold of more evidence; & it will be necessary, I think, to give once more a sketch of the origin & history of that settlement, in connection with the Regina Coeli affair.—In consequence of Sumner’s entreaty that I would bring forward as conspicuously as possible the real results of emancipation in the W. I. colonies, I have just obtained the evidence,—I believe all there is in print:& I expect more by letters or interview, very soon. (*Collected Letters* 4:101)

ここで言及されている「レジナ・チェリ事件」とは、リベリアから黒人たちを自由労働者と偽り西インド諸島などへ移送するフランス船で起きた黒人たちによる騒乱である。この事件は、フランス移民船によるリベリアから中南米アメリカへの黒人労働者の移送は、表向きは自由労働者の移送であるが、その実態は奴隷貿易であることを暴露している。加えて、マーティノーはこのフランス移民船は、フランス政府や、リベリア大統領も関与する奴隷貿易であることを明らかにし、イギリス国民にも伝えようとしている。

このように、奴隷制廃止の歴史において、重要な時期に、*WR* の保守化

により、自由に論陣を展開できなかったマーティノーは、ヘンリ・リーヴの理解を求めて、書簡を書いている。ここで彼女は、証拠となるものが、公的な文書や、書簡などに加えて、面談などの資料も入手できると説得している。「レジナ・チュリ事件」は、1858年6月24日に、イギリス議会で議論され、アメリカ、キューバに加えて、フランスも奴隷貿易を復活させているという懸念が広がっていた。しかしながら、チャップマンは、この事件に対するマーティノーの議論を過激なものとしなしていた。この当時のWRは、再び経営危機に陥っていたために、読者層の獲得が編集者にとり死活問題であった。チャップマンの手法は、編集方針を穏健にすること、つまりは保守化することであった。後に、マーティノーは宛名不明だが、親展と記された次のような書簡を書いている。

Dr C has not the knowledge necessary for the office of editor; & worse, he has not the principle. He is not a liberal, any more than he is anything else. The Review see-saws between antagonist opinions, to catch a bit of favour here & there; &, as a consequence, it has lost the main substance of public support. Orthodox & tory people, as well as liberals, used to read it as the exponent of certain avowed opinions. They knew they should find what they wanted. From the time when it began to see-saw, that material proportion of its readers gave it up, saying that they no longer knew where to have it. (*Collected Letters* 4:330)

1862年2月22日付の上記の手紙は、チャップマンについてのこれまでの高評価を大きく転換していることを窺わせる内容となっている。特に、WRが対立する意見の中で、右往左往した結果が、読者離れにつながったと分析し、結果としてリベラルな読者のみならず保守派の読者層も離れてしまったと、チャップマンの編集方針を批判している。1854年に資金援助したときの彼に対する言論や思想の自由の守護神としての高い評価は姿を消している。宛名不明であるが、“Dear Madam”と呼びかけていることから、内情を知った女性に対して、抵当権を引き上げるためのチャップマンとの交渉をかなり詳しく述べている。そこには、彼に対する大きな失望

のみならず、慨嘆が感じられる。急進派の季刊誌として創刊された *WR* にとり、自らの旗色を鮮明にできる絶好の機会が到来している折に、読者を獲得しようとして保守化していく編集方針を、原則なきものとして切り捨てている。奴隷制廃止の歴史において、上記のフランス移民船問題は、世界が奴隷制廃止に向けて努力していた時代に、再び逆行するフランスなどの動向を、阻止する重要な段階であった。奴隷制廃止をライフワークと位置付けるマーティノーにとり、チャップマンが編集する *WR* との決別は回避できないものとなった。日刊紙である *The Daily News* には、ほぼ同時期の 1852 年から 1866 年まで論説を担当している。しかしながら、マーティノーは、大西洋の両岸で繰り返される奴隷貿易の復活について、自ら入手した情報や資料に基づいて調査報道を可能にする媒体を望んでいた。それはこれまでは *WR* であったわけだが、その役割を *ER* に求めたいとヘンリー・リーヴを説得している。彼女が、定期刊行物に求めたものが推察できる書簡が下記である。

As for the “Disguised French slave-trade,” “I’m your man” I should not have proposed it, simply because it is not fresh. (I have been writing about it this twelve month.) But, not only are you the best judge of that; but I am aware there is a great difference between being always at it, in “leaders” & short articles, & giving a clear, connected, reasoned-out view of the subject. . . . I have just got scent of a new trick, which I perceive is not suspected yet: —that the Liberia shipments are, in fact, a slave-trade between the American planters & the French. (*Collected Letters* 4:101)

フランス移民船問題をさらに追及するために、リーヴにフランス関係の情報提供を受けながら、資料収集を継続している現状を彼に詳細に語っている。さらに書簡の後半では、証拠の裏付けがないことは書かないこと、内容については編集者である彼の同意を前提とすることなど、これまでチャップマンとは交わしたことの無い条件を彼女の側から提案している (*Collected Letters* 4:103)。これらは、奴隷制廃止に取り組んでいた彼女の決

意と信念が感じられる内容となっている。

このような彼女の渾身の記事が、*ER*の1858年10月号に掲載された“The Slave-trade in 1858”である。ここで彼女は、1858年の段階で奴隷貿易をしているのはアメリカとキューバであり、そこにフランスが加わっていると指摘している(108:547)。レジナ・チェリ事件は、フランスの偽装した移民船がリベリアの協力のもとに、奴隷貿易を再開している証左であると批判している(108:560-63)。アメリカ大統領のJames Buchananは、1854年の“The Ostend Manifesto”において、キューバの併合を望み、奴隷制を擁護していると指摘している(108:575)。つまり、リベリアを中心とする西アフリカからの奴隷貿易が、大西洋の両岸で、再開されているという危惧を、実名を記して伝えており、イギリスおよびイギリス国民は、このような奴隷貿易の再開に関して黙認すべきではなく、これを阻止するべきと結んでいる。この急進的な記事は訴訟となったが、マーティノーが指摘していたように十分な証拠に基づいて書かれたものであったので、事なきを得ている。この後10年余りにわたり、彼女は*ER*との関係を継続している。

結語

ハリエット・マーティノーは、その思想から、*WR*のアイドルとまで称された時期があり、彼女自身も同誌に対して、一方ならぬ思い入れを感じていた。特に、1854年のジョン・チャップマンの編集長時代には、その経営破綻を救済するために資金援助までして、思想の自由と言論の自由を守るチャップマンを評価して、この季刊誌を救済している。しかしながら、同誌が再び経営危機に陥り、チャップマンがその支援者たちに影響されて、編集方針を堅持できなかったことに対して、彼女は決然と同誌から離反した。それまでは、文学へ傾倒しているとして軽視していた*ER*の編集者であるヘンリ・リーヴに、フランスの偽装した移民船問題をはじめとする奴隷貿易の現状を掲載すべく交渉している。このようなマーティノーの一連の動向は、一見不可解に見えるかもしれない。しかしながら、それは、彼女がいかに奴隷制廃止を重要視していたのか、ジャーナリストとして、自らの意見表明の媒体をいかに必要としていたのかを如実に語るものとなっている。彼女の自由で、時に過激な政治批判は、それを論じるプラット

フォームが不可欠であった。彼女が生涯にわたり政治・経済問題のジャーナリストとして、その地位を維持できたのは、自らの思想と言論の自由のために、立ち止まることなくプラットフォームの探索を続け、自らの原則を順守し闘い続けた結果であろう。ユニテリアンとしての経験に基づき、自らの言論と思想の自由を守るために、政府からの年金給付も辞退している。本論では、一見不可解にも見える *WR* から *ER* へのプラットフォームの移行を詳細に分析することにより、ジャーナリストであるハリエット・マーティノーが直面した闘いの実相を明らかにした。

References

- Balesi, Charles J. "A 19th Century Anglo-French Dispute: The Issue of African Free Laborers." *Proceedings of the Meeting of the French Colonial Historical Society*, vol.2, 1977, pp. 75-86.
- Cowan, A. M.; James, R. V. R. "The Regina Coeli.-Testimony of Eye-Witnesses." *African Repository*, vol.34. no. 9, Sep. 1858, pp. 273-76.
- Gleadle, Kathryn. *The Early Feminists: Radical Unitarians and the Emergence of the Women's Rights Movement, 1831-51*. Macmillan, 1995.
- Huxley, T. H. "Science" *The Westminster Review*, vol.61, no. 119, pp. 254-57.
<https://play.google.com/books/reader?id=DXkVAQAAIAAJ&pg=GBS.PA254&hl=ja>. Accessed 12 April 2023.
- Landry, Herral E. "Slavery and the Slave Trade in Atlantic Diplomacy, 1850-1861." *The Journal of Southern History*, vol.27, no. 2, 1961. pp. 184-207.
- Logan, Deborah Anna, "I am, My Dear Slanderer, Your Faithful Malignant Demon: Harriet Martineau and the *Westminster Review's* Comtist Coterie." *Victorian Periodicals Review*, vol. 42, no. 2, 2009, pp. 171-91.
- Martineau, Harriet. *The Collected Letters of Harriet Martineau*. Pickering and Chatto, 2007. 5 vols.
- . *Harriet Martineau's Autobiography*. Edited by Gaby Weiner. Virago, 1983. 2 vols.
- . *Harriet Martineau's Letters to Fanny Wedgwood*. Edited by Elisabeth Sanders Arbuckle, Stanford UP, 1983.
- . "A History of the American Compromises" Reprinted, with additions, from *The Daily News*. John Chapman, 1856. www.google.co.jp/books/edition/A_History_of_the_American_Compromises_Re/XfR4wWpDP0QC?hl=ja&gbpv=1&dq=History+of+American+Compromises&printsec=frontcover. Accessed 11 May 2022.

- .“‘Manifest Destiny’ of the American Union” *The Westminster Review*, vol. 68, no. 133, July 1857, pp. 137-76. babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=uc1.b000787427&view=1up&seq=149&skin=2021. Accessed 22 July 2021.
- .“The Slave-Trade in 1858.” *The Edinburgh Review*, vol. 108. Oct. 1858, pp. 541-86.
- Mineka, Francis Edward. *The Dissidence of Dissent: The Monthly Repository, 1806-1938*. U. of North Carolina P., 1944.
- Parnaby, Margarete. “William Johnson Fox and the ‘Monthly Repository’ circle of 1832-1836”, PhD thesis, Australian National University, 1979.
- Peterson, Linda H. “Harriet Martineau, woman of letters” *Harriet Martineau: Authorship, Society and Empire*, edited by Ella Dzelzainis and Cora Kaplan. Manchester UP, 2010, pp. 15-37.
- Rosenberg, Sheila. “The financing of radical opinion: John Chapman and the *Westminster Review*.” *The Victorian Periodical Press: Samplings and Soundings*, edited by Joanne Shattock and Michael Wolff. Leicester UP, 1982, pp. 167-92.
- Sanders, Valerie. “‘I’m your man’: Harriet Martineau and *The Edinburgh Review*.” *Australian Victorian Studies Journal*. vol. 6. 2000, pp. 36-47.
- Scholl, Lesa. “Provocative agendas: Martineau’s translation of Comte.” *Harriet Martineau: Authorship, Society and Empire*, edited by Ella Dzelzainis and Cora Kaplan. Manchester UP, 2010, pp. 88-99.
- Thrall, Miriam M. H. *Rebellious Fraser’s: Nol Yorke’s Magazine in the Days of Maginn, Thackeray, and Carlyle*. AMS, 1966.
- Watts, Ruth. *Gender, Power and the Unitarians in England, 1760-1860*. Longman, 1998.
- Webb, R. K. *Harriet Martineau: A Radical Victorian*. Heineman, 1960.
- アール、ジョナサン『アフリカ系アメリカ人の歴史：大西洋貿易から20世紀まで』古川哲史、朴珣英訳、明石書店、2000。
- 布留川正博『奴隷船の世界史』岩波書店、2019。

* 本論文は、シンポジウム「19世紀出版文化とユニテリアン・ネットワーク—Harriet Martineauを中心として」における研究発表「Harriet Martineauと*The Westminster Review*」に加筆修正した。

Summary

Harriet Martineau and *The Westminster Review*: Her Choice and Criteria of the Platform for Abolition of Slavery

Mieko Matsumoto

Harriet Martineau successfully started her career as a socio-political journalist, after publishing *The Illustrations of the Political Economy* in 1832-34. As *The Westminster Review* founded by Jeremy Bentham was a highly prestigious and liberal magazine, she felt honoured to accept offers to write articles from the magazine. However, her relationship with the periodical varied in an interesting process that clarifies what she required from the periodicals and why she could maintain a lifelong career. Therefore, her relationship with *The Westminster Review* will be analysed in detail, focusing on her abolitionism, as follows.

First, Martineau, as a Unitarian, was eager to improve Victorian society because the Unitarians were discriminated against as dissenters, both socio-politically and religiously. Many reform-minded Unitarians had a strong affinity towards Bentham's moral philosophy of Utilitarianism, stating "the great happiness of the great number". Thus, Martineau was on good terms with *The Westminster Review*. In the 1850s, especially when John Chapman was its editor, Martineau helped him financially and dared to obtain the magazine's mortgage, because she appreciated and held in high regard his commitment towards free-thought and free-speech. In 1853, she published the translation of *the Philosophy of Auguste Comte* by Chapman and was admirably reviewed in *The Westminster Review*.

Secondly, Chapman decided to change the editorial policy to orthodoxy

and conservatism because the magazine fell into financial debts and in urgent need of increased readership. Consequently, Martineau's articles were not suitable for *The Westminster Review* anymore. The turning point of their relationship was her article, "'Manifest Destiny' of the American Union" (1857), which was too radical in his view. In 1858, the anti-slavery movement entered a new phase globally because France reopened the slave trade. As a liberal journalist, Martineau stood by the firm principle of abolitionism, and, therefore, transferred from *The Westminster Review* to *The Edinburgh Review*, which she had regarded lightly so far.

In conclusion, her relationship with *The Westminster Review* illustrates how Martineau needed the liberal platform to propagate her frequently radical opinions. Without the platform, her views to improve society politically could neither reach the Victorian readers nor she could achieve the aim of reforming society itself. Therefore, throughout her life, she kept writing in the liberal periodicals to disseminate her free-thought and free-speech and maintained her career as a socio-political journalist.